

日本庭園の萌芽をみる

— 考古学からみた飛鳥・奈良時代庭園の変遷 —

網 伸 也

はじめに

『日本書紀』推古天皇二〇年（六一二）是歳条に、作庭に関する最古の記事がみられる。それによれば、百濟から渡来した人の中に、全身に斑紋がでている者がおり、海中の嶋に隔離しようとしたところ、「能く山岳の形を構く」才があると進言したため、宮の南庭に須弥山と呉橋を造らせた。その人の名を「路子工」またの名を「芝耆摩呂」という。呉橋を架けたことから池も造られたと想定でき、池と橋と須弥山で構成される異国風の庭園が、我が国で初めて現出したことを伝える。

この庭園が造られたのは、小墾田宮のことである。小墾田宮の構造については入朝や朝参関係の記載から、南門（宮門）を入った中に庁を伴う朝廷が広がり、奥には大門（閤門）によつて朝廷から画された大殿が復原されている。『日本書紀』からの復原案であり記事の解釈には慎重な態度を要するが、後の朝堂院にみられる朝政の場としての機能が、小墾田宮で成立したことを示唆する（岸 一九七五）。

このような小墾田宮の「南庭」に、様々な構造物を伴う園池施設が造営されたと伝える『日本書紀』の記事は、律令国家の成立過程を考えるうえで非常に興味深い。古代中国では王権の威儀を整え、帝王の徳をはかるものとして、園林（庭園）が営まれたという（金子 二〇〇二）。後の天武朝には飛鳥浄御原宮に「白錦後苑」が付随し、奈良時代の平城宮には「南苑」・「松林苑」・「西池

宮」などが認められる。朝政の場としての宮と、儀礼・饗宴の場としての園林が相互補完しながら機能しており、その祖型が七世紀前半にまで遡る可能性がある。そして、その伝統は平安宮の神泉苑や冷然院などにも引き継がれる。

古代における庭園空間は、觀賞を目的とするばかりでなく実務的な機能性も備わり、儀礼あるいは祭祀とも密接に関わっている。庭園には、まず特定の場がある。そこに樹木・草花などを植え、池を穿つて山を築いたり、石や建物を配置して景観を整える。園内には道が造られる場合もあるし、石敷きによつて広い空間を造り出す場合もある。また、特定の場を利用して、儀礼・祭祀などが行われる。庭園は一つの限定された目的のために利用される場ではなく、多様な機能が複合的に重なった空間といえる。ただ、古代において庭園と認識できる場合は、王権であれ個人であれ常に私的に管理・所有される空間であり、公共性をもつ広場とは性格を異にする（加藤 一九八三）。

このように、庭園内には様々な構成要素が存在するが、発掘調査で検出できるものは石造構造物や大地に掘りこまれた池などが主であり、樹木・草花などの植栽や人工的に創出された山・道などの微地形は失われていることが多い。また、空閑地として検出された場が、庭園内でどのように機能していたのか復原することも困難である。しかし、園池を中心とする庭園関係遺構の意匠・構造・空間構成などを分析することによつて、作庭当時の姿を時代ごとに復原していくことが可能となる。古代庭園の構造変遷を捉えることは、日本庭園の源

流を明らかにするだけでなく、造形意匠や造園技術の変化の中に前代から引き継ぐものと、新たに創出されるものを見だし、その背景に隠れた古代人の思想・精神を明らかにする作業といえる。

ここでは上記の問題意識を踏まえ、これまでの発掘調査成果や研究成果から飛鳥時代から奈良時代にかけての庭園の構造と変遷について概観し、庭園構成の変遷の意義について考古学の立場から考えていく。

一 飛鳥時代庭園の系譜と変遷

古代庭園の大きな流れは、飛鳥時代の幾何学的形態を主流とする石積みなど人工的要素が強い園池から、汀線に曲線を多用して洲浜や景石などで修景する奈良時代の曲池意匠への変化が指摘されており（高瀬 一九九八）、平安時代には前代からの意匠を引き継ぎ、より自然風景を意識した園池を造り出すようになる。この背景として、大陸伝来の技術を積極的に採用しつつも、庭園意匠としては自然風景を取り入れようとする強い趣向が早い段階から養われていたことがあり、観賞だけでなく納涼など日本の風土に適した実用性も重視されたためと考えられている（森 一九四五）。これは村岡正氏が指摘するように、日本庭園が一貫した流れとして持つ、「単に自然そのままの風景を忠実に写すというのではなく、作庭の題材として選んだ風景を理想化し、独特の縮景法によって、自然の象徴化につとめようとする大きな特色の原点ともいえるものである

（村岡正 一九七八）。

作庭という行為が我が国で初めて意識された飛鳥時代には、限られた空間に人工的造形物を配置して外部と異質な空間を造り出す。それは冒頭で述べた「路子工」の作庭伝承に如実に現れており、『日本書紀』推古天皇三十四年（六二六）春六月条に、蘇我馬子が「嶋大臣」と呼ばれた由来として、飛鳥川の辺に家を構え、庭内に小さな嶋をもつ小池を造営したことを伝えるのも、馬子邸における園池造営が異質な行為として目に映ったからであろう。しかし、飛鳥時代庭園の中には大陸伝来の新しい要素とともに、古来からの精神・思想を反映した要素も共存する。その基底となったと考えられるのが、「水辺の祭祀」である。

「水辺の祭祀」には、城之越遺跡（図1）のように湧水点において執り行われた祭祀と（三重県埋蔵文化財センター 一九九二）、南郷大東遺跡（図2）のように浄化施設を設置し木樋によって聖水を祭祀場に引き込んで執り行う流



図1 城之越遺跡の湧水祭祀遺構



図2 南郷大東遺跡の流水祭祀遺構

水祭祀がある（奈良県教育委員会 二〇〇三）。南郷大東遺跡の祭祀場の中心となるのは、屋内に据えられた槽を伴う木樋であり建物内の閉じられた空間なのに対し、城之越遺跡にみられる湧水祭祀は基本的に開放的な空間になっており、祀られた儀礼の性格が異なっていた可能性が指摘されている（青柳 二〇〇三・穂積 二〇〇五）。この二つのタイプの「水辺の祭祀」は、古墳時代の首長居館である三ツ寺I遺跡における導水石敷き祭祀遺構と、主殿建物の脇に石敷き祭祀遺構と対峙するように設けられた覆屋をともなう井戸との関係に対応している（財団法人群馬埋蔵文化財調査事業団 一九八八）。また、宝塚一号墳のくびれ部に設けられた出島状施設の東西の谷間に、対峙するように導水畝形埴輪と湧水畝形埴輪が置かれていた事実からも、これら二つの「水辺の祭祀」が古墳時代に共存していたことが想定できる（穂積 二〇一七）。

しかし、これら古墳時代の祭祀形態は、六世紀以降には閉ざされた空間における流水祭祀が認められなくなり、大きく変容していったと考えられる（榎村 二〇〇五）。とくに、六世紀末から七世紀初頭と考えられている上之宮遺跡では、懸樋で給水して擬似的な湧水を作りだす方形の石積遺構が検出されており、そこから石組み溝によって流れ出した水が石敷き遺構へと導かれる祭祀施設となつている（桜井市教育委員会 一九八九）。上之宮遺跡の遺構群については、石積遺構の周囲が貼石によって飾られるなど造形的に鑑賞の要素を強くもっており、「園池遺構」の成立過程において前代の湧水点祭祀と流水祭祀が統合されたとの意見もある（坂 一九九六）。これらの遺構群はまだ儀礼空間としての機能が主体であり観賞する庭園ではないが、それまでの「水辺の祭祀」は石や木などによって機能的に造形されており、これらの修景が飛鳥時代における庭園空間の成立に深く関わっているのは間違いないであろう（本中 一九九八）。

飛鳥時代の庭園関係遺構は、曲水のような石組み排水溝をともなう不整形の玉石組園池が石敷き広場に形成される古宮遺跡（図3）（奈良国立文化財研究所 一九七六a）や、巨大な堤によって貯水する大規模な方形池が発見された島庄遺跡（図4）（秋山 一九七六）など、多様な様相をみせている。そこでは、広場の園池で執り行われる儀式を「見せる」ことで王権との共同意識を高める機能や、積石で美しく飾った堤をもつ広大な溜池を鑑賞させることで強大な王権の存在を知らしめる機能が新たに期待されたのである。また、「水辺の祭祀」における首長層による聖水の管理が権威の象徴となり、首長への聖水の供献儀礼が共同体の服属儀礼に繋がっていくが（辰巳 一九九〇）、推古朝以降の大王を頂点とする新たな支配システムのなかで擬似的湧水の場合が服属儀礼の空間として再構築されており、その具体的な姿が石神遺跡の須弥山石造物や石組方形池に現れていると考えられる。



図3 古宮遺跡の玉石組園池



図4 島庄遺跡の方形池

さらに、聖水祭祀の空間は、両槻宮との関連が想定されている酒船石遺跡（図5）の亀形導水施設のようなステージへと変貌し、王権が執り行う水辺の祭祀場として確立するのである（明日香村教育委員会 二〇〇六）。そこは、湧水から流れを作り出し亀形石槽へと聖水を導く閉ざされた神聖な場所であり、群臣が儀礼に参加し見ることはあっても観賞する庭園ではない。そういう意味では、亀形導水施設は南郷大東遺跡にみられる流水祭祀の空間を継承したものとえよう。そして、このような儀礼祭祀の場とともに、園林や迎賓施設が宮都空間に計画的にレイアウトされるのは斉明朝と想定されている（相原二〇〇一）が、私は飛鳥時代の初期庭園史における四天王寺亀形石槽の歴史的位置づけを明らかにするなかで、斉明朝の宮都空間の原型は前期難波宮期の孝徳朝にまで遡ると考えている（網 二〇一九）。どちらにしても、庭園関係遺構が宮都空間に配置された諸施設の機能を支える重要な構成要素になったのである。

その後、天智天皇によって近江大津宮に遷都が行われると、琵琶湖を眼下に備える自然景観が宮の空間構成に大きな影響を与えたようである。大津宮に関連する園池遺構はまだ発見されていないが、饗宴という視点からみると服属儀礼である饗よりも、君臣の一体感を高める宴が目立って行われる。古代の「饗（あへ）」と「宴（とよのあかり）」の本質については、「饗」は服属儀礼的な性格を強くもつ王権の支配



図5 酒船石遺跡遠景

秩序の維持確認を目的とした飲食儀礼なのに対し、「宴」は王を中心とした個人的な関係を確認する親睦を目的とした飲食儀礼といえる（榎村 一九九九・二〇〇三）。『日本書紀』の饗宴関係の記事をみると、七世紀前半には群臣との宴よりも服属儀礼としての饗を重視していたようで、とくに対外関係を強く意識していたのと対照的である。近江遷都翌年の天智天皇七年（六六八）正月七日には、遷都に揺れる人心を結束するため内裏において群臣に宴を賜っており、天智天皇一〇年五月五日の宴では天皇は西小殿に御して皇太子・群臣を宴している（『日本書紀』）。とくに後者の宴で、天皇が大殿ではなく西小殿に御しているのは、大津宮内裏の空間構成を考えるうえで示唆的といえよう。

大津宮の立地条件をみればわかるように、宮の東には琵琶湖が迫っており、琵琶湖対岸の山並が借景となつて西からの景観が最も趣がよかったと推定できる。南面する宮であつても景観的には東を向いた宮構造だったと考えられ、同年一月の大友皇子への諸大臣の誓約の時も皇子は内裏西殿の織仏像の前に御していた。また、宮の東の湖岸には「浜台」が設けられており、天智天皇七年七月には蝦夷を饗するとともに、舎人らに宴をとるところで行わせている。大津宮の庭としての空間構成は、西に天皇の御在所があり東に自然景観が広がる野趣あふれたものであつたと推定できよう。

このような宮中枢部から自然景観を眺望する趣向は、群臣との宴を重視する政策とともに飛鳥に戻つた天武天皇にも継承された。壬申乱後、飛鳥浄御原宮に遷都した天武天皇は、天智天皇と同じく翌年（六七三）正月七日に宴を賜っている。その後、新王権の共同意識を高めるために群臣への宴を度々開催しており、宴を通じて天皇と親王や群臣たちとの共同意識の向上が期待された。たとえば、「大極殿」で行つた天武天皇十二年（六八三）正月七日の宴では筑紫より献上された三足の雀が群臣たちに披露されたが、それを受けて出された正

月一八日の詔で天武天皇は「親王と諸王及び群卿と百僚、併て天下の黎民、共に相歎びむ」とのたまっている。また、天武天皇九年正月宴では天皇は「向小殿」に御して王卿たちを「大殿之庭」に宴しているが、天皇が「向小殿」に御した正月七日宴は翌年にもみられ、ここでは親王・諸王たちを「内安殿」に召し入れ、諸臣は「外安殿」に侍らせた。

ここで注目すべきことは、飛鳥京跡宮殿遺構の内郭南区画の西脇建物が飛鳥浄御原宮段階に解体され、自然風景を強く意識した池状遺構(図6)を新たに造営している点である(奈良県立橿原考古学研究所 二〇〇八)。池状遺構は浅い窪み状の遺構で、拳大の礫を洲浜状に敷き詰めており、北岸に二箇所、南岸に一箇所岬状の張り出しをもつ。給水の施設は検出できていないが、排水はおそらく南に接する石組東西溝から上水が流れ出たと考えられる。林部均氏は『日本書紀』にみえる「内安殿」を内郭北区画の南正殿、「外安殿」を内郭南区画正殿にあて、「向小殿」を北区

画南正殿の東脇建物に比定している。飛鳥浄御原宮は飛鳥川右岸の立地から景観として西に開いており、宴では東の小殿に天皇が御して西を向く空間利用となっていた。園池は視点を東西逆にした大津宮における琵琶湖の縮景と同じであり、園池が宴の場を効果的に飾る観賞のための装置として確立しはじめたことを示唆する。

さらに、飛鳥京跡宮殿遺跡の北西で発見された苑池遺構(図7)は、飛鳥

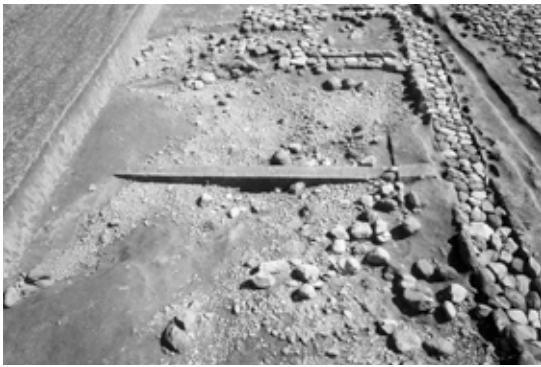


図6 飛鳥京跡宮殿池状遺構

時代後期の園池の実態を具体的に示す貴重な事例である(奈良県立橿原考古学研究所 二〇一二)。遺跡は宮殿遺跡の推定北西隅部から段丘崖を約七メートル下った平坦面に立地しており、大正年間には流水溝を穿った出水石造物が出土した場所である。苑池は石積護岸で構築され、渡堤を挟んだ南池と北池で構成される。

南池の西岸は直線的で平面プランとして扇状を呈し、池底には扁平な石を敷き並べていた。南岸部には池内に穿孔石造物が立ち、出水石造物と合わせて噴水状の流水施設を構成する。また、東に隣接した南岸で別系統の導水を溜める石槽が据えられ、これら給水の石造物群を取り囲むように池内で柱列を検出した。西岸南半部でも石造群を臨むように建物が建てられたようである。池内の中島は平面意匠として不整曲線を描いており、石積護岸を垂直に積み上げで構築する。また、中島の南には扁平な石を積み上げた島状石積みが設けられていた。

南池の水は、北岸の渡堤に設置された木樋によって、一段下がった北池と繋がっている。北池も南池と同様に石積護岸だが、西岸から北西岸にかけてと北東部は階段状に構築されており、令和元年度に実施された第一三次調査では北東階段を下りた南の東岸部に石組研をともなう湧水施設が新たに発見された(奈良県立橿原考古学研究所 二〇一八・二〇一九)。まだ調査の途中であり今後の調査成果によって北池



図7 飛鳥京跡苑池遺構

の全容が解明されていくであろうが、南池に柵で閉ざされた噴水状施設と石槽で構成される流水祭祀空間、北池に石組柵による湧水祭祀空間という、古来からの水辺の祭祀空間を苑池内に取り入れた新たな庭園構造であったことが明らかになりつつある。

これら飛鳥京跡苑池遺構は、位置的關係から飛鳥京宮殿遺跡との關係が深く、『日本書紀』天武天皇一四年一月条に見える「白錦後苑」の有力な候補地となっている。北池と南池の湧水施設と流水施設は前代の祭祀空間を苑池内に取り入れるだけでなく、苑池を飾る造形物としての性格が強くなっており、祭祀だけでなく鑑賞の対象にもなっていた可能性が高い。つまり、本来ならメインとなるべき祭祀空間よりも、そこから水が注ぎこむ苑池全体の景観が重視されはじめたことを示しているのである。そして、護岸は基本的に直線を志向し前代の意匠を継承するが、中島の形態は明らかに宮からの眺望を意識して曲線護岸で構築されており、ここに自然景観を縮景して觀賞する、日本庭園の萌芽を認めることができる。

ただ、飛鳥京跡苑池遺構の構造に關していえば、護岸や汀線の修景、中島の造形意匠など新羅で発見されている古代苑池との類似性が指摘されており、大陸文化の強い影響は飛鳥京跡苑池遺構の造営において最も顕著に現れているようにみえる。七世紀第4四半期は新羅との交流が盛んに行われる時期であり、この時期に慶州の園池スタイルが持ち込まれた可能性は充分にある(栗野 二〇〇八)。飛鳥浄御原宮の後苑は、古墳時代の祭祀空間を継承した飛鳥時代園池の技術的伝統と、自然風景を縮景して表現する趣向、そして新羅から新たに持ち込まれた園池デザインを統合して造営されたのである。

飛鳥京跡苑池遺構の造形意匠は平城宮東院の最下層園池の構造に一部継承されていくが、奈良時代にはより自然風景を意識した園池となり、大陸風スタイル

ルともいべき園池意匠は日本独自の變貌を遂げていく。ただ、これら自然風の園池意匠は奈良時代に始まるものではなく、すでに大津宮と琵琶湖との景観的關係、あるいは斉明天皇二年(六五六)に造営された天武・持統朝に多くの行幸が認められる吉野離宮の景観が強く影響したことは想像に難くない。宮滝遺跡で発見された草付き護岸の園池は、柿本人麻呂が「水はしる滝の宮子」と歌った美しい自然景観の中に違和感なく溶け込んでいたのである(奈良県立橿原考古学研究所 一九九六)。また、『万葉集』に歌われた嶋宮の光景は、「嶋の荒磯」とあるように池汀には海の岩場を縮景し、「磯の浦廻」には「石上つつじ」が植えられ、さらに「東の滝の御門」と呼ばれた門があることから、園池の東方に滝の存在も推定できる。島庄遺跡の大型方形池とは意匠がまったく異なり、「勾乃池」と呼ばれる自然景観を多く取り入れた園池が嶋宮にも存在した。

なお、宮滝遺跡の園池は、吉野川の壯観な岩場景観が随所にみられる吉野離宮において、あえて石を使用しない自然池風の優しい意匠が取り入れられているが、池の北岸の山裾部で湧水關係と考えられる方形土坑も検出している。天武天皇八年(六七九)五月の吉野宮行幸の際には、諸王が天皇への誓約を行っており、誓約の場として湧水儀礼が利用されたとすれば、宮滝遺跡で検出した一連の遺構との關係を想定できるかもしれない。自然景観を重視した宮滝遺跡の園池にも、伝統的な儀礼祭祀の場が設けられていた可能性がある¹⁾。

飛鳥時代の庭園は祭祀空間だけではなく、饗宴などを行う「見せる場」として築造されたため、玉石を多用した人工的景観が強調される結果となった。しかし、古代の人々の自然景観への趣向は、海に浮かぶ神仙境への憧憬とともに、縮景という形で作庭意匠の中に取り入れられるようになり、紆余曲折しながらも奈良時代以降の庭園に引き継がれていったのである。

二 奈良時代の園池の展開

奈良時代における庭園関係の遺構も池が中心で、ほとんどが平城宮を含めた平城京内で発見されている。池の形態は汀線を蛇行させるいわゆる曲池が主体で、飛鳥時代で多く想定された懸樋などの導水施設はみられない。また、旧流路や谷筋・古墳周濠など水を得やすい場所に池が築造される事例が多く、逆に言えば奈良時代の園池は立地条件に規定されるため、平安京の庭園と同様に様々な形態の池が現れることになる(田中 一九八七)。

奈良時代の庭園意匠の変遷を考えるうえで、まずは平城宮東院庭園(図8)の構造の変化を検討する。平城宮東張り出し区画の南半は、『続日本紀』に見する「東院」に比定されており、光仁朝には「楊梅宮」として改修造営されたと考えられている(岩本 一九九一)。また、遷都当初は平城宮初期の内苑である南苑であったとする説が有力となっている(小澤 一九九六)。東院庭園は奈良時代を通じて使用されていたことが、発掘調査で明らかとなっており、その変遷が奈良時代の庭園意匠の変化に対応すると考えられる(奈良文化財研究所 二〇〇三)。

平城宮造営当初の最下層園池は、平面プランが単純な逆L字形を呈し、汀線は出入りがなく直線的である。護岸は玉石を垂直に積み上げた石積護岸部と、玉石を緩やかな斜面に貼り付けた部分が認められ、池底は基盤層の砂利層である。給水施設は確認できていな



図8 平城宮東院庭園

いが、排水は池東南隅から東南に流れる素掘り溝で行う。北岸から北へ約一八メートル離れた地点に、東西九間で南廂をもつ東西棟建物が建てられていた。下層園池は最下層池のプランを踏襲しながら、岬状の張り出しを各辺に設けて緩やかな曲線の汀を志向する。護岸は玉石を汀線に沿って立て並べ、その上の斜面に礫を敷いて洲浜を構築する部分と、斜面にそのまま大きめの礫を敷いた洲浜部分で構成される。池底は、汀線にそって帯状あるいは半円状に平坦な玉石敷きを行うが、汀縁石と底部玉石敷きの間に帯状に石を敷かない部分が多く認められる。性格は明らかになっていないが、水成植物を植えるためのスペースではないかと想定されている。池中央部は基盤層の砂層のままで、水深は深くて五〇センチメートル、浅い所で一〇センチメートルにも満たなかったようである。最下層園池と同様に景石は認められないが、池の北西に曲流する玉石溝が造られていた。勾配は非常に緩やかで、上流部には石敷きの上水施設が伴う。給水は東大垣の西雨落溝と、西北からの流水を集める石組み溝を、池北東部で合流させて導水する。排水は西南隅から上水を石組み溝で排水し、東南隅からは木樋での排水を行う。

上層園池は、奈良時代後葉に下層池の玉石敷きを全面改修して、池底から汀斜面・陸部にかけて全面礫敷きとする。南半部池内では、いびつな瓢箪形を呈する



図9 東院上層園池の築山石組

礫敷きの中島を新たに築造した。北岸では池に突き出すように築山を造り、石を組み上げて山形となし(図9)、そのほかの岬の張り出し部や中島などにも景石を配するなど、自然景観をより意識した造形意匠となっている。水深は五〇二五センチメートルと非常に浅く、汀の礫敷きは場所によって礫径を変えて、様々な視点に対応させて意匠に変化を持たせている。なお、池北東部を拡張し、その北側に石をまばらに配した小さな池を設ける。この小池は石組み溝から導水した水を浄化させる施設と考えられている。排水は南東隅の木樋を開渠として再利用する。

以上のように東院庭園は、石積み直線護岸を主体とする最下層園池から、護岸立石という人工的意匠を継承しながら曲池として改修される下層園池、そして曲線と礫敷洲浜を多用して自然景観を意匠の中に強く意識した上層園池へと興味深い変化を見せている。ここで園池の形態からみれば、最下層園池は明らかに前代の意匠を踏襲している。垂直に立ち上がる石積み護岸や、コーナー部を隅丸形にする意匠は、島庄遺跡の大型方形池や飛鳥京跡苑池遺構にもみられるものである。ただ、石積み護岸だけではなく斜面に玉石を貼る汀が認められ、洲浜意匠の萌芽が作庭当初から認められる。そして、造営後まもなく改修された下層園池では、自然景観に近い曲線の緩やかな傾斜をもつ汀とし、非常に整った洲浜が形成される。

奈良時代の早い段階で園池の洲浜意匠が成立する事例は、平城宮跡佐紀池庭園遺構でも認めることができる。平城宮跡北西部に現存する佐紀池は築造が奈良時代にまで遡る園池遺構であり、谷筋の水を塞ぎ止めて貯水する。池尻の水門と考えられる排水遺構から和銅六年の年紀をもつ木簡が出土しており(奈良国立文化財研究所 一九七六b)、『続日本紀』天平一〇年(七三八)七月七日条にみえる、聖武天皇が大蔵省での相撲節後に御した「西池宮」の苑池と考え

られている。

園池の汀は北半の西岸および東岸と、東岸から東南へ屈曲する地点で北岸を突出しており、汀の緩やかな斜面には拳大の礫を敷いた洲浜が作られていた。また、佐紀池庭園遺構は東院庭園とは異なり、東岸洲浜の陸部に自然石の景石を据えて景観を整えており、洲浜と景石のセットで園池を修景する(奈良国立文化財研究所 一九七七)。溜め池構造の園池は谷筋の地形によって形態が規制されるが、汀線が自然な曲線を描き汀の斜面も緩やかなものになる。谷筋を形成する山(丘)を背景に意趣溢れた園池を築造することができ、汀を礫敷で飾ることで水際の護岸とともに海浜の姿を縮景するのに最適だったといえる。

さらに、古墳を再利用した成立期の洲浜もある。平城京左京一条三坊十五・十六町では八世紀の第1四半期に遡る古墳の周濠を改修した園池遺構(図10)が発見されており、出入りを複雑に作り替えた洲浜の前面には二箇所に景石群を配置していた(奈良国立文化財研究所 一九七五)。平城宮北辺地域では市庭古墳の外堤部を利用した園池が発見されており(奈良国立文化財研究所 一九八一)、平城宮の禁苑である松林苑でも多くの古墳が借景として利用されていることから、周濠に水を湛える古墳の景観が庭園に取り入れられ、葦石に洲浜の姿を重ねたことも充分ありえる。しかし、古墳を再利用した場合、葦石面を埋めて斜度を極端に緩やかに作り直しており、古墳の景観が直



図10 平城京左京一条三坊園池遺構

接庭園意匠に影響を及ぼしたとは考えにくい。むしろ、山河海浜の縮景の場を内陸地で求めたとき、古墳を庭園に再利用するのが最も適しており、その汀線処理の手法が洲浜の成立を導いたのである（本中 一九九二）。

また、長屋王邸宅でも西内郭の南で園池の北岸洲浜を検出しており、水深は推定で二〇センチメートルほどで、池底は基盤層である粘質土のままである。造営当初に遡るかどうかは不明だが、長屋王邸宅に付属する園池であることは間違いなく、邸宅内に人工的に造営された園池でも洲浜意匠が採り入れられている（奈良国立文化財研究所 二〇〇〇）。前代の意匠を強く継承する東院園池でも、幾何学的平面形態の最下層園池から曲池の下層園池への改修がすぐに行われており、景石の修景はまだ認められないが自然を意識した作庭趣向の影響を受け、優美な礫敷き洲浜をもつ庭園として整えられたのである。

ただ、東院下層園池では護岸として立石列を施す汀があり、池底にも平坦な玉石を敷いている。これは水深が浅く、汀や池底を奇麗に見せるための工夫と考えられるが、立石列や玉石敷きを施すことによって人工的雰囲気が強く表出する。むしろ、東院下層園池は自然景観を意識しつつも、意匠的に人工的デザインを残した園池であった可能性がある。そして、平城京内でも長屋王邸宅の南に隣接した左京三条二坊六坪において、共通した造形意匠を多くもつ宮跡庭園（図11）が発見されている。長屋王邸宅は長屋王の変の後、



図11 平城京宮跡庭園

恭仁宮遷都以前の皇后宮が置かれたと推定されており、その南の宮跡庭園も皇室に関わる京内離宮としての性格が想定できよう（奈良国立文化財研究所 一九八六）。

園池は六坪の中心に位置しており、旧菰川流路の上層に石を貼って造成している。平面は強く蛇行した形態で最大幅七メートル、導水口から排水口まで南北約五五メートルである。池底には平坦な石を敷き詰め、水際は玉石を立て並べている。立石列の外側緩斜面には扁平な玉石を並べ、さらに外側斜面には拳大の礫敷きを施す。水深は二〇〜三〇センチメートルと浅く、北西の池底と南東池尻付近の池底に水成植物を植えるための木枠が設置される。東院庭園の下層園池と同様に、池底の玉石敷きと水際の立石列との間に带状に石を敷かない部分認められる。池への導水は、旧菰川上流部に井戸を穿ち、導水木樋を設置して池北端の石組み柵（図12）に水を注ぎ込み、浄化された水が池本体に流



図12 平城京宮跡庭園の石組み柵



図13 平城京宮跡庭園の景石

れ出す。池尻にも排水木樋を設置し、通常はオーバーフロウした水を南へ流すが、池内の水を引く時には排水木樋の栓を開けてすべての水を流し出す構造になっている。東院下層園池と異なるのは、景石による修景がなされている点である。汀張り出し部の景石は池に突き出すように建てられているが(図13)、汀線外の景石群は伏せて変化を造りだしており、園池の造形意匠を高めている。

園池を巡る空間は、北端導水部に東西柵、東に南北柵が設けられており、池を東の建物から眺望する構成である。造営当初は園池西南から約一五メートル離れた位置に南北棟建物が建てられているが、庭園に臨む建物は一棟のみであり、建物からの観賞とともに曲流する園池の汀が宮廷儀礼の場としても機能した。東院下層園池でも、北半西岸部に東側柱を池内に建てる東西棟建物と、南岸に北側柱を汀に出す東西棟建物を配しており、園池と建物群が一体化した庭園構成となるとともに、西岸建物の北西には曲流玉石溝が設けられ、「曲水宴」の場としての利用も指摘されている(岩永 二〇〇二)。同様の曲流玉石溝は、上層園池の南西部でも新たに設けられており、園池が宮廷儀礼の装置を兼ね備える点で宮跡庭園と共通する。

つまり、東院下層庭園や宮跡庭園は、宮廷儀礼の空間を「見せる」ための園池として機能しており、前代から継承する玉石敷きの意匠で飾ることによって、自然界を超越した理想郷の姿を映し出したと考えられる。ここで行われた宴は、空間的に多くの官人たちが集うものではなく、限られた人々が私的關係の中で繰り広げられたものであり、宮廷儀礼を通じて天皇と侍臣たちとの親睦関係を確認する場であった。その装置としての庭園は、前代と同様に人工的景観美によって飾られる必要があったのかもしれない。

その後、東院上層園池において、玉石利用の造形意匠は一挙に払拭される。

緩やかな汀は全面礫敷きで洲浜仕様にし、池に突き出す築山に石を組み上げ、中島や岬にも景石を配するなど、平安時代庭園に引き継がれる意匠が各所に見受けられ、日本庭園史における画期として捉えられている(小野 二〇〇三)。そして、何よりもこの時期の園池の特徴として、建物からの眺望として外景を意識するようになる。

北半部西岸の建物が大きく建て替えられて西岸と東岸を水上廊で連結させるようになると、池北東部の拡張に伴って新造された橋とともに園内を回遊してより多方面からの景観を楽しむ庭園構成になる(図14)。西岸建物の視点からは園池意匠の変化を局地的に楽しむ趣向となるが、それとは別の視点で園池北岸に大型の楼閣状建物を建てて庭園全体が眺望できるようになる。楼閣建物からの視点は俯瞰景であり、庭園の全景だけでなく大垣を越えて平城京の町並みや東西の山々が眺望できたことであろう。また、後には敷地の南東隅に楼閣建物を建てて、庭園を眺望する視点を北から南東に移し、宇奈多理神社の高まりを築山として平城宮諸殿や平城山丘陵を借景とした俯瞰景へと変えている。庭園の造形意匠だけでなく、庭園の遠景と近景を観賞する複数の視点が同時に併存するようになる。

このような庭園を観賞する二つの視点は、宮跡庭園でも後期段階で成立する。宮跡庭園では天平宝字年間以降、園池の約二〇メートル西に大型の南北棟礎石建物が主殿として造営され、池



図14 東院上層園池の水上廊建物

南西部にも汀に接して南北棟建物が建てられる。主殿建物は一定の距離をおいて園池を臨む建物であり、東の春日・三笠山山系を借景に取り入れて情趣あふれた景観を楽しむことができる。それに対し、後者の建物は園池を近景として局地的に楽しむ建物となる。これらの建物配置の変化は、閉ざされた園池内だけを觀賞する視点から、池と殿堂の間に「庭」としての儀式・遊宴空間を創出し、視点を異にする建物群で空間が構成されるようになったことを意味しており、平安時代邸宅の庭園構成に大きく影響を与えたと考えられる（本中一九九四）。

なお、東院地区では庭園遺構だけでなく、近年では北側の台地上において、樓閣宮殿とも想定できる大規模な総柱建物や長大な建物などを発見しており（奈良国立文化財研究所 一九九九・奈良文化財研究所 二〇〇六b・二〇〇七）、主要殿舎群と庭園が別空間となつて饗宴や儀礼を行う平城宮禁苑の姿が明らかになりつつある。『続日本紀』によれば、東院あるいは楊梅宮での宴は侍臣または五位以上で、主典以上や蝦夷は朝堂で饗している（神護景雲三年正月一七日条・宝龜五年正月一六日条）。また、天平一二年の正月踏歌節会でも南苑で侍臣を宴し、百官および渤海客は朝堂で饗する。これらの記載から、東院地区には侍臣たちと宴を行う主要殿舎群が想定でき、発掘調査で発見された建物群がおそらく相当するのである^②。

以上、発掘調査で明らかとなつた奈良時代の主な庭園遺構を概観してきた。飛鳥に造営された園池が「自然の中の人工」であるなら、平城京で育まれていった園池は方形街区の宮都空間において自然の豊かな表情を現出させた「人工の中の自然」であるとの指摘がなされている（平澤 二〇一一）。平澤毅氏によれば、日本における庭園は東院上層園池や宮跡庭園、そして阿弥陀浄土院庭園など極めて洗練された庭園が造営された奈良時代後半に確立し、平安時代

に日本庭園へと昇華したといえるのである。

三 「水辺の祭祀」空間のゆくえ

平城京内では自然湧水が少ないために、庭園に泉を利用した施設がまだ発見されていない。たとえば、東院庭園では宮大垣の雨落溝から石組溝で小池を通して導水しており、宮跡庭園では旧菰川に穿たれた井戸を介して木樋で池北端の石組柵に導水する。奈良時代の宮城や邸宅では、地質的環境から庭園内における自然湧水へのこだわりがあまり認められなくなり、飛鳥京跡苑池まで継承されてきた儀礼空間としての湧水施設の意義がおおいに後退するとともに、庭園の鑑賞の機能が重視されていく^③。その結果、東院上層園池にみられるような自然景観を意識した庭園意匠の発達につながっていったと考えられる。

では、湧水および流水祭祀の空間はどのような展開をみせるのであろうか。その手掛かりは、井泉の神聖性と宗教施設とのかかわりにある。儀礼祭祀空間から園池が切り離され、園池は日本庭園の源流となる独自の発展を遂げていくのに対し、井泉は従来の神聖性に回帰して神社や寺院などの宗教施設と結びついていった。というよりも、そもそも水稲農耕を主な生業としていた古代日本人にとつて、清い水を湧出する井泉に神聖性を求め、そこに水に関連した神の存在を認めたのは自然な流れであり、宮都での展開とは別に井泉が本来もつていた聖なる場が神社仏閣などの宗教的空間に代わっていったと考えるほうが妥当かもしれない（森・牛川 一九六六）。

湧水の場合に神社が設けられることは、水にかかわる神々の存在から十分に想定できるが、ここではとくに寺院との関係から井泉の神聖性を確認しておきたい。湧水地の神聖性により寺院が造営される事例として、古くは四天王寺が想定できる。四天王寺の創建年代については諸説あるが、『日本書紀』推古天皇

三一年七月条に新羅から貢献された舍利・金塔・灌頂幡などを四天王寺に奉納した記載が最も信頼できる史料と考えられており、六二三年には現在地に造営されたことがうかがえる。南から中門・塔・金堂・講堂が一直線上に並ぶいわゆる四天王寺式伽藍であるが、伽藍地の北から北東にかけて湧水の豊かな開析谷が東に開いており、伽藍の北東部はこの谷地形の斜面を造成して建立されている。

平安時代後期に編纂されたと考えられる根本本『四天王寺縁起』には、伽藍地にはもともと青龍が住処とする荒陵池があり、造営に際して青龍を鎮祭して堂塔を建立した。以後、伽藍はつねに青龍によって守護され、「白石出水」と称する麗水が東に向かつて流れる聖地となったとする。「白石出水」については現在の亀井堂亀形石造物(図15・16)にあたると考えられ、その造営時期が孝徳朝までさかのぼる可能性があることは先に述べた。つまり、七世紀中ごろには伽藍地の湧水を利用した流水祭祀空間となつていていることから、創建期に伽藍地をここに点定したのも神聖なる湧水とのかかわりが十分想定できるのであり、その伝承が『四天王寺縁起』にみられる青龍が守護する伽藍として表現されたものと考えられる。⁽⁴⁾

また、『日本書紀』天智天皇九年(六七〇)三月条によると、近江大津宮の山御井のほとりに諸神の座を設けて班幣の儀を行つており興



図15 四天王寺亀井堂(手前の基壇が関伽井跡)



図16 四天王寺亀井堂の亀形石造物



図17 園城寺関伽井

味深い。「山御井」は、現在の園城寺(三井寺)金堂脇の山際にある関伽井(図17)に想定されているが、園城寺金堂周辺の下層には出土瓦から近江大津宮にかかわる寺院跡の存在が考えられる。ここでも聖水祭祀の場が古代寺院へと代わつていく状況がうかがえるのである(林 一九八九)。ちなみに、「三井寺」は「御井寺」のことであり、斑鳩法輪寺の地名号「三井寺」も斑鳩の御井と関係する可能性がある。このように、御井の存在と古代寺院の造営には七世紀段階から深いかわりがある。このように、御井の存在と同様に聖水の湧出する聖なる空間が意識された結果が寺院造営につながつたと考えられる。

奈良時代になつても、天平勝宝八年(七五六)に描かれた『東大寺山堺四至図』に多くの湧水地点が書き込まれていることから、井泉が宗教的機能を多分にもつ神聖な場所と認識されていたことがわかる。そして、湧水祭祀の場は関伽井として山林仏教と結びつき、東大寺東山の上院伽藍、香山堂などが建立さ

れた(森 一九七二)。とくに、上院伽藍の羅索堂の北側に描かれた井泉は二月堂の閼伽井で、現在でも東大寺二月堂で行われるお水取り(修二会)の行法において、毎年三月二日(旧暦二月二日)の深夜に香水を閼伽井から二月堂へ汲み上げる秘儀が執り行われている(図18)。

お水取りの行法は、『東大寺要録』諸院章によれば天平勝宝四年(七五二)に実忠和尚が十一面悔過を行ったことに始まるとされる。この時、実忠和尚が神名帳を読んで諸神を勧請したところ、遅れてきた遠敷明神がその行法を聞いて歓喜し、閼伽水を献上する旨を告示するとともに、黒白の鶴が磐を穿ち地中より甘泉が湧き出たという。この井泉が二月堂の閼伽井であり、遠敷明神が祀られる若狭国遠敷郡では献水のときに遠敷川の水の流れがなくなること伝えられている。

このような井泉の水が神々の威力によつて湧出するという考えは、新帝踐祚の日に中臣氏が奏上する「天つ神の寿詞」にも通じるものである。「天つ神の寿詞」は秘伝であるが、近衛天皇の大嘗祭に大中臣清親がとねえた「中臣の寿詞」が『台記』の別記に載せられており参考になる。その中で、天孫が服する「御膳つ水」は「天つ水」を加えて奉ることがうたわれており、その「天つ水」は天上から授かつてきた「天の玉櫛」を差し立てて祈禱したところに湧き出す「天の八井」の水だとされる(岡田 一九八〇)。つまり、



図18 東大寺二月堂と閼伽井

天上の聖水が神力によつて地上の井泉から湧出するのであり、井泉の聖水を汲み取る儀礼がさまざまなかたちで継承されていたことを示している。

さらに興味深いのは、お水取りの行法は閉ざされた閼伽井の暗闇の中で湧水を汲み取る秘儀であり、ここでは従来は機能分化していた湧水祭祀と流水祭祀が統合していることである。飛鳥京跡苑池遺構まで認められた湧水祭祀と流水祭祀の場合は、平城遷都後の展開の中で京内の園池空間から消え去り、山林の宗教空間において整理されていた状況がうかがえる。そして、平安時代に入ると湧水が豊かな平安京において、宗教空間の神聖な井泉への憧憬が基層となり、貴族邸宅における主要建物群と庭園との一体化が進むとともに泉の造作が重視されるようになったと考えられるのである(網 二〇一一)。

平安貴族邸宅の園池では、平城京で育まれた自然景観への強い意識が庭園意匠として確立していったといえる。その全容が発掘調査で明らかとなったの



図19 「斎宮」邸宅園池遺構



図20 「斎宮」邸宅園池の泉

が、平安京右京三条二坊十六町の「齋宮」邸宅園池遺構(図19)であった(財団法人京都市埋蔵文化財研究所 二〇〇二)。確認された園池は東西一五メートル、南北四〇メートルほどで平城京宮跡庭園と同じ形状・規模であるが、宮跡庭園のような石敷きの人工的な意匠は認められず、汀には草付き護岸を多用するとともに池の北西につくられた洲浜には拳大ほどの石を面を揃えずに置き、池の南岸は小さな玉石を敷き詰めるなど、自然の荒磯や砂浜を意識する意匠となっている。そして、園池の北端には横板と石組みで修景する泉(図20)が設けられ、湧き出た清水が柵の南西隅から南へ流れて浄化されながら園池本体へ流れ込んでいた。

ここで注目すべきことは、泉には人形代が鎮められており、泉が納涼や鑑賞・園池への給水の機能だけでなく、湧水祭祀の空間として園池に再び取り入れられていることである。それは、飛鳥時代の園池でみられた湧水・流水祭祀施設から直接継承されたものではなく、これまでみてきた宗教空間における井泉の神聖性から、邸宅内の泉にも意識的に神の存在をみようとした平安貴族の思いが反映しているものと思われる(網 二〇〇九)。

平安時代後期に成立したと考えられる『作庭記』には、理想とする自然景観や宗教思想を作庭という行為のなかに表出させようとする非常に高い理念が窺えるが、その中に「泉事」として次のような一文がある。

暑をさること、泉にはしかず。しかれば、唐人必ずつくり泉をして、あるいは蓬萊をまなび、あるいは獣のくちより水をいだし。天竺にも須達長者祇洹精舎をつくりしかば、堅牢地神来て泉をほりき。すなはち甘泉なり。吾朝にも聖武天皇東大寺をつくりたまひしかば、大壬生明神泉をほれり。縞索院の阿加井是也。

また、「遣水事」として、東に水が流れる四天王寺亀井を取り上げ、「太子傳

云、青龍常にもまれるれい水東へながる。この説のごとくならば、逆流れの水也といふとも、東方にあらば吉なるべし」と説いている。亀井の水が「泉事」ではなく、「遣水事」の中で東への逆流れが吉となる事例として記載されているのは、平安時代になっても湧水祭祀とは異なる流水祭祀空間として無意識に認識されていた結果とも考えられる。これまでみてきたように、山林などの宗教空間で新たに創出されていた井泉の神聖性や聖水の流れが、平安貴族邸宅における泉の造作と園池の構造に大きな影響を与えていたのであり、ここに日本庭園の井泉に対する精神的基層が認められるのである。

おわりに

平成から令和へと時代が大きく変わろうとしていた新春の若狭神宮寺(図21)で、平成最後のお水送りの行事が三月二日に行われた。お水送りの日は天気が荒れるというが、地元の方々のお話とはうって変わって穏やかな温かい日より恵まれたなか、厳粛に挙行されるお水送りの諸神事に立ちあうことができたのは幸運といえる⁽⁵⁾。

お水送りは元来「送水の儀」として継承されてきた儀式で、近代以降に途絶えがちであった神事を昭和三六年に復興したときに、お水送りと呼ばれるようになったという。東大寺二月堂のお水取りの行法で若狭の遠敷明神が香水を実忠和尚に献上したことに由来し、修二会の行法のなかで清められた鬺伽水を、堂内で再度清められた火によって浄化し(図22)、参詣者に分与された火の松明とともに聖水を大和へ送り届ける。若狭と大和が地下でつながっているという厚い信仰を肌で感じるとともに、神仏の威力によって聖水が井泉に湧出するという日本古来の精神にも触れることができた。

飛鳥時代に作庭がはじめて意識され、庭園の空間が形成されはじめたとき、



図21 若狭神宮寺本堂



図22 お水送り達陀行法

新たな王権支配を誇示する場として自然の中に人工的な景観を創出した。これら揺籃期の庭園は、理想化した自然への趣向が強まるなかで曲池意匠へと変化し、奈良時代後半以降には日本庭園につながる園池が展開しはじめるという、段階的な発展が想定されている。しかし、日本庭園の萌芽過程は、庭園の重要な構成要素だった聖水祭祀の空間が再び園池から分離されるなど、連続的でスムーズな展開を示すわけではなかった。とくに、園池から聖水祭祀の場が消えることによって庭園空間が従前の思想体系から解放され、園池意匠全体に神仙世界や浄土などの新たな理想郷が再現されるようになる。そして、その理想郷に改めて井泉の神聖性が組み込まれ、縮景した自然のなかに統合していったのが、平安時代に展開する庭園なのではないだろうか。

日本庭園が確立していったとされる平安時代の庭園には泉が多く認められるが、そこには納涼や鑑賞などの機能面だけでなく、神聖なる清水を介して神仏

とつながる深層心理が形成されていたと考えられよう。そして、神の宿る井泉が湧出する場として、庭園には自然景観を縮景した意匠が求められた。園池空間が表出する精神的な理想世界は、時代ごとに大きく変化をしている。そのようなかで古代の人々が最後に希求した神々の坐す自然への回帰も、日本庭園が成立していく一つの重要な要素であったことを、新春の若狭の地で強く感じた次第である。

註

(1) 宮滝遺跡では、吉野川に面した河岸段丘上の西部遺構群の調査が進められており、大型掘立柱建物を中心とする奈良時代前期の離宮関連建物群が発見されている(奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 二〇一九)。

これらの建物群は、大型掘立柱建物の正面に万葉集にも詠われた象山がそびえ、吉野川の溪谷をすぐに望む立地であることから、奈良時代の吉野離宮の中心である可能性が高い。今後は斉明朝から持統朝ころと推定されている園池遺構をともなう中央部遺構群との関係が課題となろう。

(2) 東院と同様に大型建物群と庭園が空間を異にして併存する事例は、「西池宮」と想定されている佐紀池庭園遺構でも確認されている。佐紀池の南西で長大な脇殿を伴う左右対称な宮殿遺構を検出しており(奈良国立文化財研究所 一九七一・一九八九・一九九四)、「西池宮」は天皇が御する殿舎群と後方に苑池空間を備えた広大な施設であったと想定できる。ちなみに、神亀四年(七二八)三月三日に「鳥池塘」に御して曲水宴を行っていたが、佐紀池は谷筋を塞ぎ止めて築造した苑池であり南堤(塘)が想定できることから、「鳥池塘」は佐紀池庭園遺構を指すと考えられている(岸 一九七九)。

(3) なお、条坊をとまなう京の成立によって、邸宅内から湧水・流水祭祀空間が切り離されていく傾向は、藤原宮段階から認められると考えられるが、藤原京内ではまだ園池をとまなう邸宅が発見されていない。

(4) なお、亀井堂亀形石造物は酒船石遺跡の亀形導水施設と同様に、古来からの流水祭祀の空間を継承したものと見える。仏事の聖水を汲む閼伽井は亀井堂のすぐ南に隣接して造営されており、その姿は一三世紀末の『一遍聖絵』にも描かれている。亀形石造物と閼伽井の機能が厳密に分けられていたことは注意すべきである。奈良時代の宗教空間における新たな湧水祭祀への統合に連動するかのようには、飛鳥では酒船石遺跡の亀形導水施設が平安時代初めには機能しなくなるのに対し、四天王寺では亀形石造物が性格を変えながら閼伽井と共存していったのである。

(5) お水送りに先立つ若狭地域の現地調査は平成三十二年一月一日から四日にかけて行い、美浜町教育委員会の松葉竜司氏にお世話になるとともに、若狭神宮寺の山河尊聖氏と下根来地区の原良光氏に貴重なお話を伺うことができた。とくに、神宮寺で山河氏にご教示いただいたおりに、京都国立博物館名誉館員の久保智康氏にご同席いただき、多くのご協力を賜った。ご高配を賜った皆様に、改めて感謝の意を表する次第である。

参考文献

- 相原嘉之 二〇〇一「飛鳥亀形石造物の発見と水利用石造物群」『国宝と歴史の旅一〇 新しい飛鳥の歩き方』朝日新聞社
- 相原嘉之 二〇〇二「飛鳥の古代庭園―苑池空間の構造と性格―」『古代庭園の思想―神仙世界への憧憬』角川書店

青柳泰介 二〇〇三「導水施設考―奈良県御所市・南郷大東遺跡の導水施設の評価をめぐる―」『古代学研究』一六〇

秋山日出雄 一九七六「飛鳥島庄の苑池遺構」『仏教芸術』一〇九

網伸也 二〇〇九「平安京の「齋宮」邸宅」『平安文学と隣接諸学六 王朝文学と齋宮・齋院』竹林舎

網伸也 二〇一〇「寝殿造系庭園」成立以前における平安時代の庭園」『比較考古学の新天地平』同成社

考古学の新天地平 同成社

網伸也 二〇一一「発掘された平安前期の貴族邸宅庭園」『平安時代庭園の研究―古代庭園研究Ⅱ―』奈良文化財研究所学報第八六冊 奈良文化財研究所

網伸也 二〇一九「初期庭園史からみた亀井堂亀形石槽」『四天王寺亀井堂石造物調査報告書』和宗総本山四天王寺

造物調査報告書 和宗総本山四天王寺

岩永省三 二〇〇二「奈良時代庭園の造形意匠」『古代庭園の思想―神仙世界への憧憬』角川書店

岩本次郎 一九九一「楊梅宮考」『甲子園短期大学紀要』第一〇号

榎村寛之 一九九九「飲食儀礼からみた律令王権の特質」『日本史研究』四四〇

榎村寛之 二〇〇三「天皇の饗宴」『岩波講座天皇と王権を考える第九巻 生

活世界とフオークロア』岩波書店

榎村寛之 二〇〇五「大王の祭祀から天皇の祭祀へ」『水と祭祀の考古学』学生社

岡田精司 一九八〇「大王と井水の祭儀」『講座日本の古代信仰第三巻 呪な

いと祭り』学生社

小澤毅 一九九六「宮城の内側」『考古学による日本歴史五 政治』雄山閣

小野健吉 二〇〇三「飛鳥・奈良時代の庭園遺構と東院庭園」『平城宮発掘調

- 査報告XV「東院庭園地区の調査」奈良文化財研究所学報第六九冊 奈良文化財研究所
 化財研究所
 加藤充彦 一九八三「日本庭園成立前後の問題」『文化財論叢』 同朋社出版
 金子裕之 二〇〇二「宮廷と苑池」『古代庭園の思想―神仙世界への憧憬』 角川書店
 岸俊男 一九七五「朝堂の初歩的考察」『榎原考古学研究所論集 創立三十五周年記念』 吉川弘文館
 岸俊男 一九七九「嶋」雑考『榎原考古学研究所論集 第五』 吉川弘文館
 栗野隆 二〇〇八「庭園スタイルの模倣と創造―苑池の空間デザインと古代日本―」『日韓文化財論集Ⅰ』奈良文化財研究所学報第七七冊
 高瀬要一 一九九八「飛鳥時代、奈良時代の庭園遺構」『ランドスケープ研究』 六一―三
 辰巳和弘 一九九〇『高殿の考古学―豪族の居館と王権祭祀』 白水社
 田中哲雄 一九八七「古代庭園の立地と意匠」『造園の歴史と文化』 養賢堂
 村岡正 一九七八「日本庭園」『設計・施工造園技術大成』 養賢堂
 橋本裕之 一九九二「聖なる水の湧きたつところ」『国立歴史民俗博物館研究報告』第三九集 第一法規出版株式会社
 林博通 一九八九「園城寺」『近江の古代寺院』 真陽社
 坂靖 一九九六「古墳時代の導水施設と祭祀―南郷大東遺跡の流水祭祀―」『考古学ジャーナル』 三九八
 平澤毅 二〇一一「奈良時代までの庭園―平安時代庭園検討の前提として―」『平安時代庭園の研究―古代庭園研究Ⅱ―』奈良文化財研究所学報第八六冊 奈良文化財研究所
 穂積裕昌 二〇〇五「もうひとつの水のまつり―湧水点祭祀の世界」『水と祭祀の考古学』 学生社
 穂積裕昌 二〇一七『船形埴輪と古代の喪葬 宝塚一号墳』 新泉社
 本中眞 一九九二「平城宮東院庭園に見る意匠・工法の系譜について」『造園雑誌』 五五―五
 本中眞 一九九四『日本古代の庭園と景観』 吉川弘文館
 本中眞 一九九八「飛鳥・奈良時代以前の庭園関連遺構」『ランドスケープ研究』 六一―三
 森瀨 一九四五『平安時代庭園の研究』 桑名文星堂
 森瀨 一九七一『奈良を測る』 学生社
 森瀨 一九八六『作庭記』の世界―平安朝の庭園美― 日本放送出版協会
 森瀨・牛川喜幸 一九六六「東大寺閼伽井の周辺」『大和文化研究』 第一二巻 三号
 明日香村教育委員会 二〇〇六『酒船石遺跡発掘調査報告書』明日香村文化財調査報告書第四集
 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 二〇〇二『平安京右京三条二坊十五・十六町―「齋宮」の邸宅跡―』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第二一冊
 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 一九八八『三ツ寺―遺跡―』
 桜井市教育委員会 一九八九『奈良県桜井市阿部丘陵遺跡群 桜井南部特定土地区画整理事業にかかわる埋蔵文化財発掘調査報告書』
 奈良県教育委員会 二〇〇三『南郷遺跡群Ⅲ』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第七五冊
 奈良県立橿原考古学研究所 一九九六『宮滝遺跡（遺構編）』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第七一冊
 奈良県立橿原考古学研究所 二〇〇八『飛鳥京跡Ⅲ』奈良県立橿原考古学研究所

- 所調査報告第一〇二冊
- 奈良県立橿原考古学研究所 二〇二二『飛鳥京跡Ⅴ―史跡・名勝飛鳥京跡苑池(一)―』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第一二二冊
- 奈良県立橿原考古学研究所 二〇一八『史跡・名勝飛鳥京跡苑池第一二次調査(飛鳥京跡第一八〇次調査) 現地説明会資料』
- 奈良県立橿原考古学研究所 二〇一九『史跡・名勝飛鳥京跡苑池第一三次調査(飛鳥京跡第一八二次調査) 現地説明会資料』
- 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 二〇一九『発掘 古代の宮滝遺跡リフレット』
- 奈良国立文化財研究所 一九七二『奈良国立文化財研究所年報一九七二』
- 奈良国立文化財研究所 一九七五『平城宮発掘調査報告Ⅵ―平城京左京一条三坊の調査―』奈良国立文化財研究所学報第二三冊
- 奈良国立文化財研究所 一九七六 a 『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅰ―小墾田宮推定地・藤原宮の調査―』奈良国立文化財研究所学報第二七冊
- 奈良国立文化財研究所 一九七六 b 『奈良国立文化財研究所年報一九七五』
- 奈良国立文化財研究所 一九七七『昭和五一年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』
- 奈良国立文化財研究所 一九八一『平城宮北辺地域発掘調査報告書』
- 奈良国立文化財研究所 一九八六『平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告書』
- 奈良国立文化財研究所学報第四四冊
- 奈良国立文化財研究所 一九八九『昭和六三年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』
- 奈良国立文化財研究所 一九九四『一九九三年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』
- 奈良国立文化財研究所 一九九四『一九九三年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』
- 奈良国立文化財研究所 一九九九『奈良国立文化財研究所年報一九九九―Ⅲ』
- 奈良国立文化財研究所 二〇〇〇『奈良国立文化財研究所年報二〇〇〇―Ⅲ』
- 奈良文化財研究所 二〇〇三『平城宮発掘調査報告ⅩⅤ―東院庭園地区の調査―』奈良文化財研究所学報第六九冊
- 奈良文化財研究所 二〇〇六 a 『古代庭園研究Ⅰ―古墳時代以前―奈良時代―』奈良文化財研究所学報第七四冊
- 奈良文化財研究所 二〇〇六 b 『奈良文化財研究所紀要二〇〇六』
- 奈良文化財研究所 二〇〇七『奈良文化財研究所紀要二〇〇七』
- 三重県埋蔵文化財センター 一九九二『城之越遺跡―三重県上野市比土―』三重県埋蔵文化財調査報告九九―三
- 図版写真提供
- 図1…三重県埋蔵文化財センター(撮影 佃幹雄・井上直夫 奈良国立文化財研究所(当時))
- 図2・4・6・7…奈良県立橿原考古学研究所
- 図3・8・10・11…独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所
- 図5…明日香村教育委員会
- 図15・16…宗教学法人四天王寺
- 図19・20…公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所
- 上記以外の写真図版は網が撮影